



都市のカルチュラル・ナラティブ

2024

CULTURAL CITY
NARRATIVE OF A
都市のカルチュラル・ナラティブ



都市の カルチュラル・ ナラティヴ 2024

01 包摂的な文化体験の創出

P.04 01-01 多様な文化機関におけるインクルーシヴ実践ワーキング・グループ
森山 緑

P.06 01-02 食の歴史・文化を体験するインクルーシヴ・ワークショップ
『『きょうの料理』でめぐる 100 年! ツアー』
森山 緑

02 地域の文化資源を可視化し、相互につなぐラーニング・ ワークショップの開催

P.08 02-01 ラーニング・ワークショップ『『放送博物館』で考える——
アナログ技術のこれまで・これから』
石本 華江

P.10 02-02 シンポジウム「庭と現代美術: 出来事を捕獲すること」
久保 仁志

P.12 02-03 ラーニング・ワークショップ「妙定院のシティ・
スケープ: 都市の定点観測者としての寺院」
本間 友

P.14 02-04 明治から現代まで: 学校建築公開日
新倉 慎右

03 プロジェクトの運営、連携拡大とモデルの共有

P.16 03-01 モデル共有化のためのアーカイヴ構築および公開
本間 友

P.17 03-02 活動評価のためのワーキング・グループ
本間 友

都市のカルチュラル・ナラティブ '24

現在、各地域で大規模な再開発が行われている港区では高度に情報化する社会変化と連動し、街のありかたや産業が大きく変化している。新たなコミュニティや活動の生成と変容は大都市のダイナミックな魅力だが、近年、その変容の速度が加速度的に高まっている。その変容への対応における世代やデジタル・リテラシー、障がい、ライフステージ、価値観の相違がもたらす分断や孤立が深まっている。

このような現状に対して、ミュージアムの果たす役割は大きい。ミュージアムは、文化を継承すると同時に、新たなコレクションの受け入れやその調査研究、展覧会・イベントの開催などを通じて、時代に即した文化の更新と社会への再接続を行っている。新旧の文化を、それぞれの特徴を保持しつつも相互に接続・発展させる、このミュージアムの営みは、社会と都市の急速な変容がもたらす分断を回避するための重要な実践となり得る。

また国際的なビジネスの場であるだけでなく、現代・過去の文化が積層する港区で展開する多様な活動には、引き続きそれらを接続・横断する場が必要となる。というのも都市文化の魅力は、過去と現在を往還するダイナミズムにあり、多様なコミュニティどうしの交流の場が必要とされているのである。この課題へのアプローチに際してもミュージアムの存在は重要である。異なる専門性を持つミュージアムや類縁機関が連携することによって、領域横断的な企画の開催、参加者コミュニティの

形成を実際的に進めることができるからである。

また港区には、企業が運営する企業博物館や専門図書館、アーカイヴが数多く存在する。小規模な私立美術館も、良質なコレクションをもとに活動を展開し、地域の文化を形成している。これらの文化機関の活動理念は、各機関の運営母体（ペアレント・インスティテューション）の歴史やミッションに強く結びついている。これらの文化機関とゆるやかな、しかし実質的な連携を築くことが、多様な文化活動を横断する場を作るために必要である。

本年は「1. 包摂的な文化体験の創出」「2. 地域の文化資源を可視化し、相互につなぐラーニング・ワークショップの開催」「3. プロジェクトの運営、連携拡大とモデルの共有」の3事業を軸に活動を行い、5つの公開イベントと4つのワーキング・グループを実施した。

本書で報告する活動は、ミュージアムの活動を社会的包摂という視点から新たに捉え直す取組である。共通の文化体験によりさまざまなコミュニティのメンバーの接続を図るだけでなく、ふだんは気づきにくい、自らが属する都市の文化財を可視化し、新たな担い手を得ることも目的とする。

また都市のカルチュラル・ナラティブでは、イベントをはじめとするプロジェクトの活動をモデル化し、他地域のミュージアムへの実践共有を行うことなどを通じて、事業の成果をモデルとして共有を目指している。本報告書が同様の課題をもつ諸氏、諸機関の一助となれば幸いである。

Cultural Narrative of a City '24

In Minato-City, where large-scale redevelopment is currently underway, the transformation of the city and its industries is closely linked to the societal changes brought about by increasing informatization. The creation and transformation of new communities and activities are dynamic attractions of large cities, but in recent years, the speed of this transformation has been accelerating. Differences in generations, digital literacy, disabilities, life stages, and values in responding to these changes are leading to fragmentation and isolation within the city.

In this context, the role of museums is significant. Museums not only preserve culture but also update it in response to the times, through the acceptance of new collections, research, and the organization of exhibitions and events, thus reconnecting with society. The activities of museums, which promote the development of both new and old cultures while maintaining their distinct characteristics and fostering mutual connections, could become an important practice for avoiding the fragmentation brought about by rapid transformation.

Furthermore, Minato-City, which is a hub for international business and contemporary culture, is also a historical and cultural city that preserves cultural assets from the Edo period. While various levels of activities exist surrounding the diverse cultural resources from the past to the present, it cannot be said that spaces for cross-disciplinary engagement have been sufficiently cultivated. However, the appeal of urban culture lies in the dynamism of moving between the past and the present, and there is a need for spaces where diverse communities can interact. The presence of museums is crucial in addressing this issue as well. By collaborating with other institutions with different areas of expertise, museums can effec-

tively facilitate interdisciplinary projects and the formation of participant communities.

Minato-City is home to numerous corporate museums, specialized libraries, and archives operated by businesses. Small private art museums, too, are active in the region, developing their programs based on high-quality collections and contributing to the formation of local culture. The operational philosophies of these cultural institutions are strongly tied to the history and mission of their parent organizations. Establishing loose yet substantive collaborations among these institutions is essential for creating spaces that bridge diverse cultural activities.

- Creating inclusive cultural experiences
- Organizing learning workshops aimed at visualizing and connecting local cultural resources
- Operating projects, expansion of partnerships, and sharing of models

In these projects, five public events and four working groups were held.

The activities reported in this volume represent an effort to reframe museum practices from the perspective of social inclusion. The aim is not only to connect members of various communities through shared cultural experiences, but also to make the cultural heritage of the city—often unnoticed by its residents—visible, thereby attracting new custodians for this heritage.

Additionally, in the context of Cultural Narrative of a City, the project activities, including events, are being modeled to facilitate the sharing of practices with museums in other regions. Through this process, the goal is to share the outcomes of the project as a model. It is hoped that this report will serve as a helpful resource for individuals and organizations facing similar challenges.

多様な文化機関におけるインクルーシブ 実践ワーキング・グループ

報告 | 森山 緑

アート・センターでは令和3年度から令和5年度にかけて、アクセシビリティを検討する勉強会や鑑賞プログラムを開催し、多くの課題を職員各自が実感するとともに、継続的な実施が必須であると考えてきた*。本プロジェクト実行委員会の構成メンバーには多様な文化機関が属している。自然史系博物館、放送博物館、寺院、食にまつわる資料館、アートギャラリー等、一口に文化資源といっても幅広い資料を保存し、公開展示を行なっている。本ワーキング・グループでは外国人居住者や外国人来訪者も多い地域特性により多言語対応の実施、高齢者や障がいを持つ方々への配慮、乳幼児や子供連れの方々への配慮等への対応事例を共有した。またこれまで実施してきたインクルーシブ鑑賞プログラムの事例を共有し、多面的アプローチの可能性について話し合った。

今回の座談会では一般の参加者は募らず、「視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ」の方々と公益財団法人港区スポーツふれあい文化健康財団の方々に参加していただいた。令和5年度にインクルーシブ・ワークショップを協働した増上寺から、ご担当の赤羽道宣氏に来ていただく予定を組んでいたが直前にご欠席となったため、アート・センター側スタッフの森山が前日に電話インタビューを実施し、その内容を座談会で共有した。

港区には数多く寺院が存在し多様な属性の方々が参拝に訪れている。増上寺ではハード面ではすでに多目的トイレやおむつ替え台の設置、段差解消のためのボード等の対応が行われており、能う限りの配慮が組織内でも議論されているところだという。目の見えない人見える人と共に境内散歩を行った令和5年度のワークショップでは、寺の歴史とともに文化財である三解脱門（三門）や徳川將軍家墓所を巡り、経蔵の内部にある木造輪蔵を皆で回した。赤羽氏は本ワークショップを通じて

| Event Data |

2024年11月25日（月）

視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ

林 建太

浦野 盛光

平 海依

公益財団法人港区スポーツふれあい文化健康財団

齋藤 歩

小貫 智之

宮崎 刀史紀

木元 太郎

工藤 裕子

酒井 七瀬

障がい者、高齢者、外国人等の対応に関して、対応に苦慮している点を確認すると同時に、そこまで特別な対応をしなくても良いと分かった点などを挙げ、こうしたワークショップの実施により理解が深まったと述べられた。

「視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ」代表の林氏が、これまでの活動事例を紹介し、なぜ障がいを持つ人と持たない人と「共に」参加することが重要であるかについて説明を行った。重要視しているのは、社会の中で頻繁に起きている「役割の固定化」や「無自覚の差別」であり、それらを解消してゆくための方途として多くの文化機関と共に考えつくりながらワークショップを実施しているとのことである。「まっすぐモード」と「ぶらぶらモード」の語りをバランスよく取り入れ、障がいのある／なしに関わらず、同じ立場に立って鑑賞体験をもつことがいかに重要であるかを説明してくださった。

これに関して港区スポーツふれあい文化健康財団の方々からは、非常に参考になるとの声が上がるとともに、とくに「語りのモード」の使い分けについての質疑応答があった。

*『都市のカルチュラル・ナラティヴ '21』『都市のカルチュラル・ナラティヴ』プロジェクト実行委員会／慶應義塾大学アート・センター、2022年；『都市のカルチュラル・ナラティヴ '22』『都市のカルチュラル・ナラティヴ』プロジェクト実行委員会／慶應義塾大学アート・センター、2023年。

座談会の様子



食の歴史・文化を体験するインクルーシヴ・ワークショップ

報告 | 森山 緑

和食が世界無形遺産に登録されたことにも現れているように、日本の食文化に対して近年大きな関心が寄せられている。本企画では、さまざまな属性をもつ人々を対象に「誰でも参加できる」鑑賞プログラムを実施し、「食」にまつわる多様な語り合いを通じて、障がいのある／なしや、年齢などの垣根を超えて「共に生きる」ことを身近な「食」を通して考えていくことを試みた。当初プロジェクト・メンバーである虎屋文庫との協働を模索したが、展覧会開催時期等で調整がつかず、NHK 放送博物館が開催した「きょうの料理 100 年」展での鑑賞プログラムを実施することとなった。

インクルーシヴ・プログラム

「きょうの料理」でめぐる 100 年！ ツアー

港区愛宕にある NHK 放送博物館（以下放送博物館）は 1956 年に、世界最初の放送専門のミュージアムとして、“放送のふるさと” 愛宕山に開館した。放送博物館では、100 年にわたる放送の歴史に関するさまざまな実物展示をはじめ、だれもが自由に利用できる「番組公開ライブラリー」なども擁している機関である。2024 年 9 月 14 日より企画展示「『きょうの料理』から見る日本の食」展が開催され、本ワークショップはこの展示をめぐるプログラムを企画した。

9 月 19 日にワークショップの打診をし快諾されたのを受けて 10 月 28 日に「視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ」（以下とつくるさん）のスタッフとアート・センターのスタッフで下見に伺った。これまで 3 カ年にわたりとつくるさんと協働してきた経験から、下見の際に確認しておくべきこと（順路、トイレの位置、控え室として使用する会議室、受付の設置場所等）を事前に整理し、下見での確認もスムーズに行うことが

Event Data |

2024 年 12 月 9 日（月）

NHK 放送博物館

川村 誠

山本 雅士

視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ

林 建太

浦野 盛光

松本 晶子

博物館で展示を鑑賞する参加者



できた。また放送博物館に対して本ワークショップの目的と実施のアウトラインを対面にて協議できたことで、事前準備が昨年度よりも円滑に進んだ。

11月5日オンラインにて、とつくるさんと事前打ち合わせを行った。広報物作成のためプログラムの名称を決め、鑑賞ツアーの進行について話し合った。これらの、ワーキング・プロセスは動画で記録し、他機関が有効に活用できるよう公開していきたい。

12月9日の実施日には、参加予定であったろう者の方のキャンセルに伴い手話通訳者のキャンセルも発生し残念ではあったが、視覚障がいの方（とつくるさんのスタッフも含む）と共に、「きょうの料理」がラジオ放送のみの時代から放送されていた点や、時代の変遷に沿って展示されているパネルを見ながら「ぶらぶら&まっすぐモード」で語り合った。今回は3つのポイントで立ち止まって話をするプランで、1箇所につき30分の時間をとっていた。少々長い時間かもしれないとの懸念もあったが、参加者が非常に能動的に語ってくださり、とつくるさんの鑑賞プログラムの根幹をなす、参加者同士の対話が充実し、笑いの絶えない楽しい鑑賞ツアーになった。双方向型の対話モード（ぶらぶらモード）と、見える人が「何が展示されているか」を端的に説明するモード（まっすぐモード）がバランス良く展開され予定通りに進めることができた。最後に皆で行う「振り返り」も実施することができ、参加者の事後アンケートには「自己紹介や最後の感想を発表しあったことで、色々な方の意見や思いが聞けて、楽しかった」や「全く知らない人達で、このように安心感をもって鑑賞できたのは不思議であった」「今の世の中、人とのつながりがあまりない中で、身体的な近さは不快に感じる事が多いけれど、このような機会は現代人のセラピーにもつながる気がした」など、今後の活動に繋がるコメントも頂いた。

今回のワークショップはすべてのプロセスを動画とテキストにより記録した。アート・センターのHPではテキストによる記録を公開し、広く社会に共有して他機関の参考となるモデル構築の一端を果たせたと考える。

参加者全員で最後に振り返りを行い、意見交換した



ラーニング・ワークショップ 「放送博物館」で考える ——アナログ技術のこれまで・これから

報告 | 石本 華江

本ラーニング・ワークショップでは、長く報道の現場にいられたカメラなど数々の記録媒体を扱ってこられた川村誠氏（元・NHK 放送博物館館長）に「記録媒体の変遷と技術」についてお話しいただき、ディスカッションを行なった。「放送開始 100 年」となる 2025 年を前に、放送とそれが担っていた文化をどのように継承していくのか。そして個人メディアが全盛を迎える現代において、放送文化がどのように継承され、新たな記録媒体と接触しながら更新されていくのか、デジタル化の重要性を再確認しつつ、アナログな「もの」の価値や重要性を改めて考える契機とした。

参加者は 20 代から 70 代まで、美術館・博物館の学芸員やアーカイヴ関係者などの専門家、港区在住・在勤の方、学生が同じ割合の人数が集まった。専門家が一方的に情報を与えるような講座ではなく、双方向的な学びの場を作ることを目指しているため理想的なバランスであった。何らかのパワーバランスの無い、フラットな関係性で議論をするという機会は実はとても少ない。また拙速な「結論」を出さず、問題提起をすること、各人がこの催事を通して問いをそれぞれ持ち帰って考えるための契機となること。それらを終着地とすることで、大学という学びの場の特性を活かし、「都市のカルチュラル・ナラティヴ」らしい催事となった。またどの世代にとってもアナログとデジタルの問題は重要なトピックであるが、特に 20 代の若い世代にいかに関え未来に繋いでいくか、継承の問題はテーマの一つでもある。

ディスカッションでは、「モノを残すことも重要だが、同時に機材を扱う人間の技術も残す必要があるのではないか」という問題設定を緩やかな方向づけとして、多岐にわたる話題が

| Event Data |

2024 年 12 月 21 日（土）

川村 誠 / NHK 放送博物館

東山 一郎 / NHK 放送文化研究所

西川 亜希 / フィルムアーキヴィスト

石本 華江 / 慶應義塾大学アート・センター

トークイベント&ディスカッション



出た。技術は刷新していくものだから、古い技術は残す必要がないという考え方もある。しかし常に革新を迫られる専門家の技術だけではなく、むしろ市井の人々による一見無価値かのように思われる創意工夫こそ、いかなるデジタル化社会の中でもイノベーションの原資となるのではないか。DX が叫ばれる世の中で、アナログのトランスフォーメーションを敢えて考えてみることで、こうした提案を出発点とし議論が進められた。川村氏は雲仙・普賢岳噴火の取材テープなど実際の資料をご紹介くださり、記録媒体とそれらに付随する記憶、またアナログ機材だからこそその撮影の技術についてお話があった。モノに付随するナラティブに注目することは、本プロジェクトがまさに意識していることである。さらに番組表のアーカイブなどから話題が拡がり、番組制作に関するスタッフの想いや資料の価値付け、昨今博物館等で注目が集まる個人史との接点、またモノとそれに付随するコンテクストをいかに残していくか等の重要な視点が提示され、談義が重ねられた。

続いて初公開のカメラ庫を見学した。日航機墜落事故からキャリアをスタートさせた報道カメラマンの川村氏自らの経験に基づいた機材の紹介があり、現場の緊張感も伝わるお話に参加者も熱心に耳を傾けていた。「使い捨て文化の放送」と川村氏が述べるテレビ業界の常識と、アーカイブ的な思考との擦り合わせも今後の重要な課題になることが浮き彫りになった。こうしたアナログ機材や技術の話があったからこそ、愛宕山 8K シアターで最新のデジタル技術を身体で感じられ、感慨深いものがあった。その後各人で、放送博物館の展示見学も行った。



「何を、どのように残すか」、これはアーカイブの様々な分野で共通する問いであろう。そして本人も重要性を気づいていないような技術を掘り上げて記録・保存していくことも、アーカイブの一つの使命ではないだろうか。加えて同じような機材を使うため、類似した問題も抱えているテレビ放送と映画業界だが、あまり交流がないことも今回の企画で確認できた問題点である。こうした異業界をつなぐ役割も大学ならではの特性であるからこそ、今後の企画実施でも検討していきたい内容である。



カメラ庫見学

シンポジウム

庭と現代美術：出来事を捕獲すること

報告 | 久保 仁志

ゴットフリート・ヴィルヘルム・ライブニッツは、庭園や池のモデルを通してこの世界の有り様（モノド）を次のように語っている。

物質のそれぞれの部分は、草木の生い茂る庭園や、魚群に満ちた池のようなものだと考えることができる。しかも、草木の一つ一つの枝や、動物の各肢体や、さらに、その樹液や体液の一滴一滴の雫が、またそのような庭園であり、池である。

（ゴットフリート・ヴィルヘルム・ライブニッツ「モノドロジ」西谷裕作 訳、「ライブニッツ著作集 9」工作舎、1989年、233-234頁。「モノドロジ」(1714) 67節。原文を参照し一部訳語を変更した。）

都市は、ライブニッツが語る庭園や池のように多くの文化を抱えており、その内の可視化されことなく消えゆく文化＝出来事も無数の出来事を際限なく抱えている。都市に存在する実際の庭園もまた、そのような数珠つなぎの出来事を入れ子状に抱えている。

身近なもの（道端の植栽や自宅の庭など）から間遠なもの（寺社の庭園など）まで含めた庭園は、自然性と人工性が多様な形式で結びついており、自然と人間がどのような調和／不調和を作り上げているのかについての一覧表となっている。

翻って美術の領域は古典的な絵画や彫刻といった安定した形体を 20 世紀半ばに放棄し、より一過性の高い出来事の形体を構築してきた。インスタレーションと呼ばれる現代の代表的な手法はその一つの典型だと言える。しかし、これらも継承し、未来へと繋ぐためにはその出来事を何らかの形で捕獲しなければならない。

庭園もまた、恒常的ではない一過性の出来事＝形体が様々に現れては消え去る領域、変化し続ける展覧会場だとするならば、それを捕獲するとはどういうことなのか、いかに継承可能なのだろうか。

| Event Data |

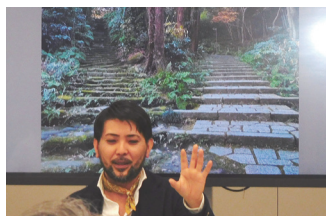
2025 年 1 月 23 日（木）

能勢 伊勢雄／アーティスト・批評家

平 諭一郎／東京藝術大学未来創造継承センター

久保 仁志／慶應義塾大学アート・センター





久保 仁志



平 諭一郎



能勢 伊勢雄



現代美術と庭園という異なる領域を照応させることによって、現代の芸術を継承するための方法について考えた。

最初に筆者が、上述した問題提起を行うとともに、瑞泉寺庭園（鎌倉）の歴史を通して、長い歴史の中で、いかに継承が秩序立てて正確に行われてきたのではなく、歪で偶然的な出来事の諸連鎖において行われてきたのかについて語った。苔生した古い階段と整序された階段とに別れた二股の参道は、過去への道と現在への道という2つの時間へのパサーージュが常に重なり合いつつ庭園が存在していることの象徴であることを述べた。

次に平氏によって西洋型の保存や修復といった方法にとられない継承方法が必要になってきていることが現代美術の諸作品を通して語られた。ダミアン・ハーストのいわゆる「サメ」として有名な《The Physical Impossibility of Death in the Mind of Someone Living》(1991年)の修復の際、まるまるサメの個体が交換された例を皮切りに、作品の「同一性の臨界」を問う諸例を次々に挙げながら、物の同一性に重きをおく現在の継承ではなく、作品を出来事として捉え、出来事を継承していく方法として、古来の継承の思想を応用することができるのではないかと提案がなされた。

最後に能勢氏によって、庭とは何か、その起源と古代からの展開について語られた。神代において庭は人と世界と神を結びつける神聖な場所であった。その痕跡は現代においても場や造形物として見出すことができる。庭とは常に、あるがままの物的存在であることを超えて、「蜃気楼へ行く」という幻影のリアリティを発生させる場所であること、その力は現代において見えにくくなっているが、決定的に重要であることが語られた。

登壇者からの発表の後、来場者から投げかけられた「どのような場面において継承したいという気持ちが立ち上がるのか」という問いは、まさに継承の核心を射抜くとともに、人間の条件のひとつとしての継承について改めて考えるための重要な一石であった。

ラーニング・ワークショップ 妙定院のシティ・スケープ： 都市の定点観測者としての寺院

報告 | 本間 友

「都市のカルチュラル・ナラティブ」プロジェクトでは、都市の寺院を、都市が蓄積する歴史的・文化的地層を見通す窓として、また過去から現在へと繋がる都市の物語の証言者として捉え、定期的に見学会やワークショップを開催している。本年は、赤羽橋に在在する妙定院を訪ね、ラーニング・ワークショップを開催した。浄土宗の寺院である妙定院は、1763年の開山以来、その場所を変えることなく、都市の風景の変化を見守ってきた。本ワークショップでは、住職によるレクチャーと、通常は公開されていない本堂の拝観を通じて、妙定院の視点から、江戸から現在までの都市の景観——シティ・スケープを探访することをねらいとした。

会場となった法然堂には、妙定院所蔵の江戸切絵図を仕立てた大きな軸が展示されていた。折りたたまれた形で目にする事が多い江戸切絵図が広げられ、一望できることで、かつての江戸の広がり生き生きと感じられる。その場に集まった人々は、興味深そうに切絵図に目を凝らし、住職が自ら解説する場面も見られた。

ワークショップは、住職の講演から始まった。妙定院の創建は増上寺や徳川将軍家と深く関わっており、江戸時代には念仏道場として栄えたこと、明治維新以降は社会の変化とともにその役割が変わり、近代都市の中で形を変えながら存続してきたことが語られた。明治維新を経て、妙定院が初めて檀家を持つようになったこと、大正時代には都市整備により境内の一部が削られたこと、戦時中には空襲によってほぼ全ての建物を焼失し、戦後に再建されたことなど、都市の変化とともに歩んできた寺の姿が、妙定院に伝わる古い絵図や、浮世絵などの参考史料を豊富に提示しつつ共有された。なかでも、戦後の再建と都市開発についての談話は印象的だった。妙定院の境内は、戦後の再建からまもなくして、1960年代の首都高

| Event Data |

2025年1月30日（木）

小林 正道／妙定院

本間 友／慶應義塾大学アート・センター

速道路や環状3号線の建設により、多くの空間を削られ、再度の変化を余儀なくされた。このような度重なる変化を受けても、寺院の努力によって変わらず受け継がれているものがある。庭園「月影園」は、開山時から形を変えながらも現代に継承されている。また、大奥との関わりが深いコレクションや、それを収める土蔵も今に残されている。

講演の後、参加者は本堂へ移動し、通常非公開の本堂内部を拝観した。ご本尊や寺宝についての説明を聞きながら、平成の時代に新たに建立された本堂の建築を見学することで、レクチャーで語られた境内の歴史と現在の空間を自らの体験の中で接続する機会を得た。

今回のワークショップでは、妙定院の歴史と都市の関係を学び、変化の中でどのように文化財が継承されてきたのかを知ることができた。また、文化財を未来に伝えていくためにどのような取り組みが求められるのかについても考える機会となった。

参加者からは、「地図や浮世絵、写真を通して、江戸時代から今に至る町の変化が目に見える形で理解できた」「都市開発の影響を受けながらも、歴史を受け継ぐ寺の価値を再認識した」などの感想が寄せられた。



レクチャー後、見学会が行われた

明治から現代まで：学校建築公開日

02-04

報告 | 新倉 慎右

建築公開日 (建築プロムナード)

慶應義塾大学アート・センターの「慶應義塾の建築」アーカイブでは、義塾が有する歴史的・文化的価値が高い建築物を社会に開いていく普及活動を行っている。文化財は価値の共有されず忘れ去られると、驚くほど簡単に損なわれてしまうことを認識し、また文化財を管理する立場にある我々にとって、こうした活動は貴重な文化財を次の世代に残していくための義務でもある。そのような観点からアート・センターでは例年「建築プロムナード」を開催し、マップを配布して三田キャンパスの建築物を鑑賞してもらう機会を設けている。普段入れない演説館や旧ノグチ・ルームも公開し、屋外彫刻も含めて文化財の存在とその価値を認識してもらうこのイベントは、毎年多くの参加者を迎えている。

他の催事や学事日程との兼ね合いから、今年は2日間の催事としている。たびたび流行してはいるものの、人々の意識に対する新型コロナウイルス感染症の影響をほとんど感じなくなって久しく、街にもキャンパスにもたくさんの人が溢れており、本催事への参加にも、こうした影響は感じられなかった。

今年度はそうした状況のもと、2日間開催であった2年前と同水準の参加者を数えることができた。コロナ明けから年々さまざまな外出先が増加していく中で、例年と同じ程度の集客ができたことは収穫ではあるが、世間の人流の増加に比例した参加者の増加を狙った施策を考える必要があっただろう。次回は早めのリリース公開、SNSでの宣伝強化、あるいは所員の方々の授業で紹介してもらう簡単なスライドの作成など、参加者の増加を図りたい。

本催事では毎年ガイドツアーを実施しており、本年も多くの

| Event Data |

2024年11月12日(火)・13日(水)

新倉 慎右／慶應義塾大学アート・センター

森山 緑／慶應義塾大学アート・センター

桐島 美帆／慶應義塾大学アート・センター



ガイドツアーの様子



| Event Data |

2024 年 12 月 19 日（木）

藤本 貴子／法政大学

種田 元晴／文化学園大学

応募者を数えた。毎回 1 グループ 15-20 人程度でのツアーだが、例年応募者がそれを上回り、抽選になっていたのが改善点であった。そこで今回は試みに、1 日 1 回だったツアー実施を各 2 回とし、合計 4 回の実施とすることで、応募者全員にツアーに参加してもらうことができた。応募人数を見て急遽決定したことであったため別の時間を取ることができず、2 グループとも同時に出発する形になった。もともと少ない人員で実施しているイベントであるため、この形式では人員配置にやや無理があったことが反省点である。参加者を増やすことでより広く慶應義塾の建築を知ってもらうことはメリットであるため、ツアー時間の別設定や、スタッフを増員するなどの対策を考えたい。

建築公開ヒアリング

当センターでは、建築物の公開において、ツアーなどのような一般的な手法だけでなく、大学付属の教育機関であることを鑑み、より教育的な手法を利用することも模索していた。そのため法政大学の藤本貴子氏と文化学園大学の種田元晴氏を招聘し、建築公開に関する実践とそこから得られた知見を共有してもらうことで、新たな公開手法検討の基礎とした。

藤本氏が実施したのは、建築家の大江宏による校舎を使用している中学生に対して法政大学の学生が実測を体験させつつ、中学生それぞれが校舎内で好きな場所とその理由を地図上にプロットしていくワークショップである。実測を経ることで改めて建築物の空間が生徒たちに内面化され、その特性を認識して建築リテラシーの向上が見られたという。また別の実践では特定の建築モチーフを他の場所でも探すという試みも行われており、慶應義塾においては複数の建築物間や、あるいは普連土学園との共同による同種のワークショップ実践も視野に入る。

また種田氏からは、自身が参加する東京建築アクセスポイントにおける建築ツアー収益化の試みや、また建築物公開と密接に結びつく保存の問題について事例を共有してもらった。建築物の保存においては歴史家と建築家、さらに施主がひとつのチームとなり、早い段階で建築物とそれを所有する人や組織との結びつきを認識してもらい、そこに文化財的な価値を加えていくことが建築物の保存に有効であることが示された。こうした価値づけに重要な役割を果たすのがアーカイブであり、当センターの「慶應義塾の建築」アーカイブの責任の重さを認識することともなった。

ヒアリングでは、さまざまな事例が共有された



モデル共有化のためのアーカイブ構築 および公開

03-01

報告 | 本間 友

「都市のカルチュラル・ナラティヴ」プロジェクトは、2016年に構想され、翌2017年度より港区の文化資源をめぐって活動を展開してきた。本格的な活動開始から8年が経ち、映像記録、報告書、技術資料、ワークシートなど、プロジェクトの活動から生み出されたリソースの蓄積も進んでいる。プロジェクトの実践やこれらのリソースを、同様のねらいをもって活動するさまざまな文化機関やグループ、個人が利用できるよう整理することによって、プロジェクトの成果がひろく共有されるとともに、モデルとして参照されることが期待される。このような目的から、本年度は、「包摂的文化体験をつくる手法と実践例」「学びのプロセスを活用して、地域文化資源を対象とする横断的文化プログラムを実施する手法と実践例」「オブジェクト・ベースト・ラーニングの手法と実践例」「規模や運営母体、領域が異なる文化機関が連携する手法」の4つの切り口を軸に、プロジェクトが蓄積してきた記録のアーカイブ構築と、ウェブサイトを通じた共有を行った。

活動評価のためのワーキング・グループ

03-02

報告 | 本間 友

| Event Data |

2025 年 1 月 31 日（金）

佐々木 亨／北海道大学

本間 友／慶應義塾大学アート・センター

「都市のカルチュラル・ナラティブ」プロジェクトのような文化プロジェクトには、どのような活動評価方法が適しているのか、2 回のワーキング・グループの開催を通じて検討した。本プロジェクトは、多様なプレイヤーによる異なるレベルの活動を重視し、それらを有機的に繋ぐことを目的とし、また、大規模で組織的なアプローチではなく、個人的で自律的な表現を尊重する姿勢を重視している。そのため、活動評価においても、プロセスに目を向けること、異なる背景を持つ個人や組織の関与にプロジェクトを開くこと、期待される成果や関与の度合いに多様性を持たせること、部分の自律を促すこと等、プロジェクトの価値観に寄り添った方法が必要と考えられる。

ワーキング・グループでは、まず、ミュージアム活動や文化事業評価を専門とする佐々木亨氏から、標準的な文化事業評価方法やその実際の適応例について、またプロジェクトの過程や「選ばれなかったルート」を可視化し、そこから学ぶことのできる評価手法のアイデアについてのレクチャーを受けた。その後参加メンバーを交えて、プロジェクトで実施可能な評価方法について、評価の目的や活用方法について議論を行った。

2024-2025 活動記録

01 包摂的な文化体験の創出

01-01 多様な文化機関におけるインクルーシヴ実践ワーキング・グループ

2024年11月25日

参加者 | 9名 場所 | 慶應義塾大学三田キャンパス

林 建太、浦野 盛光、平 海依（視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ） /

齋藤 歩、小貫 智之、宮崎 刀史紀、木元 太郎、工藤 裕子、酒井 七瀬（公益財団法人港区スポーツふれあい文化健康財団）

01-02 食の歴史・文化を体験するインクルーシヴ・ワークショップ

2024年12月9日

インクルーシヴ・プログラム「きょうの料理」でめぐる100年! ツアー

参加者 | 7名（うち視覚障害者1名、同伴者1名） 場所 | NHK放送博物館

講師 | 川村 誠、山本 雅士（NHK放送博物館） / 林 建太、浦野 盛光、松本 晶子（視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ）

02 地域の文化資源を可視化し、相互につなぐラーニング・ワークショップの開催

02-01 ラーニング・ワークショップ「『放送博物館』で考える ― アナログ技術のこれまで・これから」

2024年12月21日

参加者 | 16名 場所 | NHK放送博物館

登壇者 | 川村 誠（NHK放送博物館） / 東山 一郎（NHK放送文化研究所） / 西川亜希（フィルムアーキヴィスト） /

石本 華江（慶應義塾大学アート・センター）

02-02 シンポジウム「庭と現代美術：出来事を捕獲すること」

2025年1月23日

参加者 | 22名 場所 | 慶應義塾大学三田キャンパス

登壇者 | 能勢 伊勢雄（アーティスト・批評家） / 平 諭一郎（東京藝術大学未来創造継承センター） / 久保 仁志（慶應義塾大学アート・センター）

02-03 ラーニング・ワークショップ「妙定院のシティ・スケープ：都市の定点観測者としての寺院」

2025年1月30日

参加者 | 26名 場所 | 妙定院

講師 | 小林 正道（妙定院）

アドバイザー | 本間 友（慶應義塾大学アート・センター）

02-04 明治から現代まで：学校建築公開日

2024 年 11 月 12・13 日（ガイドツアー含む）

建築公開日（建築プロムナード）

参加者 | 436 名 場所 | 慶應義塾大学三田キャンパス

ガイドツアー講師 | 新倉 慎右、森山 緑、桐島 美帆（慶應義塾大学アート・センター）

2024 年 12 月 19 日

建築公開ヒアリング

参加者 | 5 名 場所 | 慶應義塾大学三田キャンパス

講師 | 藤本 美貴（法政大学） / 種田 元晴（文化学園大学）

03 プロジェクトの運営、連携拡大とモデルの共有

03-01 モデル共有化のためのアーカイヴ構築および公開

03-02 活動評価のためのワーキング・グループ

2025 年 1 月 31 日

参加者 | 7 名 場所 | オンライン開催

講師 | 佐々木 亨（北海道大学）

アドバイザー | 本間 友（慶應義塾大学アート・センター）

都市のカルチュラル・ナラティヴ '24

執筆 | 本間 友／新倉 慎右／森山 緑／石本 華江／久保 仁志

編集 | 「都市のカルチュラル・ナラティヴ」プロジェクト（新倉 慎右）

協力 | 馬淵 佳代／篠田 菖子

発行 | 「都市のカルチュラル・ナラティヴ」プロジェクト実行委員会

慶應義塾大学アート・センター
108-8345 東京都港区三田 2-15-45
電話 03-5427-1621 Fax 03-5427-1620
<http://www.art-c.keio.ac.jp/>

助成 | 令和 6 年度文化庁 Innovate MUSEUM 事業

2025 年 2 月 7 日

Cultural Narrative of a City '24

written by | Yu Homma/ Shinsuke Niikura/ Midori Moriyama/
Kae Ishimoto/ Hitoshi Kubo

edited by | Cultural Narrative of a City Project (Shinsuke Niikura)

cooperated by | Kayo Mabuchi/ Shoko Shinoda

published by | The Cultural Narrative of a City Project

Keio University Art Center
2-15-45, Mita, Minato-ku, Tokyo, 108-8345, Japan
+81-3-5427-1621
<http://www.art-c.keio.ac.jp/>

supported by | The Agency for Cultural Affairs, Government of Japan
in the fiscal 2024

7 February 2025



KEIO
UNIVERSITY
ART
CENTER

